

# 初級後期日本語授業の目標と課題

— 2009年度「J400」コースの実践報告 —

加納 千恵子 小林 真紀子 関 裕子  
柳田 直美 石上 綾子

## 要 旨

本稿では、筑波大学留学生センターにおける2009年度1学期の初級後期日本語補講コース「J400」の概要を中心に紹介し、このレベルでの目標を再確認するとともに、その達成のために導入されたいくつかの試みに焦点を当てて報告する。1つは、新出語彙の予習宿題の試みである。2つ目は、学習者の発音指導および意味のまとまりに注意しながら発話する練習としての「音読」である。3つ目は、即時発話力をつけることを狙いとしたデイリースピーチである。そして最後に、会話練習の仕上げとして行うオーラルテストについて述べる。1学期の成果について報告しながら、2学期の改善点、さらに今後の課題についても検討する。

【キーワード】 初級後期 新出語彙 音読 即時発話力 オーラルテスト

## Objectives and Problems of Advanced Beginners' Japanese Course: a report on the 2009 "J400" course

KANO Chieko, KOBAYASHI Makiko, SEKI Yuko,  
YANAGIDA Naomi, ISHIGAMI Ayako

【Abstract】 In this paper, the authors report the outline of the advanced beginners' Japanese course "J400" at the International Student Center of the University of Tsukuba in the 1<sup>st</sup> term of the year 2009, in order to confirm the objectives of this level and present some trial attempts in the course to achieve them. The first trial is a preparatory assignment of new words for each lesson. The second trial is a "Reading Aloud" practice for pronunciation check and for speaking while paying attention to the meaningful units in the utterance. The third is the "Daily Speech" which can train the learners' ability to produce impromptu utterances. The last is the "Oral Test," through which learners can check the results of their conversational training. The result of the coursework in the 1<sup>st</sup> term, improvements in the 2<sup>nd</sup> term and future problems will also be examined.

【Keywords】 advanced beginners, new words, reading aloud, impromptu utterance, oral test

## 1. はじめに

筑波大学留学生センターの補講の初級後期日本語コース「J400」は、75分授業を週5コマで10週、1学期で約62時間のコースである。2009年度1学期の登録者数は、1時限のJ400が27名、2時限のJ400-2が21名で、非漢字圏学習者も中国・韓国の学習者も混在していた。2009年度2学期の登録者数は、1時限のJ400が23名、2時限のJ400-2が32名で、初級レベルのクラスとしては適正人数を越えていると思われるため、3学期からはクラスが増設される予定になっている。

テキストは、『Situational Functional Japanese』(以下『SFJ』とする) Vol.3の後半6課分(19課～24課)を使用しており、聞き取り練習用に『わくわく文法リスニング』を主教材の進度に合わせて適宜使っている。学期中に2回のテスト(中間テスト:L19～L21、期末テスト:L19～L24)があり、文法と聴解の筆記テストと、オーラルテストを行う。また、ほとんど毎日文法の小テスト(SDQuiz)と、音読練習、デイリースピーチ(2学期からはDailyTalkに改める。詳しくは4.3を参照)を行っている。宿題としては、各課の新出語彙の予習宿題(NW:New Words Sheet)と各課の復習(RS:Review Sheet)を課している。

成績<sup>1)</sup>は、文法小テストの平均を15%、中間テストの結果を30%(筆記テスト15%、オーラルテスト15%=音読5%+会話10%)、期末テストの結果を45%(筆記テスト25%、オーラルテスト20%=音読10%+会話10%)、宿題の平均を10%として計算してつけている。

本稿では、この初級後期レベルの「J400」コースの概要を2009年度1学期を中心に紹介し、このレベルでの目標を達成するために導入された4つの試み、(1)新出語彙の予習宿題、(2)音読練習、(3)デイリースピーチ(後のDaily Talk)、(4)オーラルテストについて報告する。また、2学期に向けての改善点についても触れ、さらに今後の課題についても検討する。なお本稿では、1節から3節までの概説部分および5節の今後の課題を加納がまとめ、4.1の新出語彙の予習宿題については小林、4.2の音読については関、4.3のデイリースピーチ(後のDaily Talk)については柳田、4.4のオーラルテストについては石上が分担して執筆した。

## 2. コースの目標

「J400」コースは、日本語を約300時間学習して初級前半の日本語が終わり、ひらがなとカタカナはすでにマスターし、基本的な漢字200字程度が読めるような学生のためのコースである<sup>2)</sup>。コースが終わった時に、以下のことができるようになることを目指している。

- (1) 『SFJ』のL19～L24で紹介される、日常的で具体的な話題について  
コミュニケーションができるようになること
  - 1) 先生のお宅を訪問する (第19課)

- 2) やり方を説明する (第20課)
  - 3) 苦情を言う (第21課)
  - 4) 見舞いに行く (第22課)
  - 5) 頼む／断る (第23課)
  - 6) 賛成意見／反対意見を言う (第24課)
- (2) 簡単な日本語の文を読んだり書いたりすることができるようになること  
(ただし、漢字については選択クラスで学習する)
- (3) 習った文型や言葉を使って、意見を言ったり、意見を交換したりすることができるようになること

### 3. 授業の内容および進め方

受講生には、補講のオリエンテーションでスケジュール表を渡して、授業の進め方、テキスト、音声テープおよびインターネット上からダウンロードできる音源などの使い方、宿題などについての説明を行う。

300時間程度の日本語既習者を対象としているため、最初の2～3回の授業で、『SFJ』L17、18の学習項目から受身や敬語などの用法のクイックレビューを行い、レベル調整を行った後、L19から本格的な授業に入る。平均すると5回の授業で各課を終えるようなペースで授業を進めている。

- 1 回目：新出語彙のチェックとSD (Structure Drill) および音読練習
- 2 回目：SDQuizとSDおよび聞き取り練習 (わくわく文法リスニング)、音読練習
- 3 回目：SDQuizとSDおよび聞き取り練習、音読練習
- 4 回目：SDQuizとMC (Model Conversation) のDVD視聴およびCD (会話練習)
- 5 回目：CD (会話練習) とロールプレイ

授業の進め方としては、まずテキストのStructure Drill (SD) を使って、文型、文法の確認をしつつ、口慣らし練習から徐々に学生が自分で言いたいことが言えるような練習につなげていく。その後、会話練習に進み、課の終わりにはロールプレイができるようになっているかどうかによって達成度をみる。特に自然な速さの発話についていけるようにするため、また耳による文法理解の確認のために、『わくわく文法リスニング』を使った聞き取り練習も適宜行っている。

さらに音読練習 (DRA : Daily Reading Aloud) と、デイリースピーチ (後のDaily Talk) もほぼ毎回行われているが、これらの練習については4節で詳説する。

授業は口頭練習を中心に進むが、習ったことを記憶に留めやすくするために、ほとんど毎回クラスで文法クイズ (SDQuiz) を行っている。これは、授業のはじめの10分程度でできる小テストである。

さらに、各課の宿題としては、新出語彙の予習確認のための「New Words Sheet (NW)」、習った文型や語彙の用法を定着させるための復習「Review Sheet (RS)」を課している。

この「J400」クラスの特徴としては、様々な国の学習者、若い短期留学生から大学院進学を目指す研究生、時には研究者までが混ざっており、このレベルとしてはかなり大きいサイズのクラスであることが挙げられる。したがって、1人1人の学生の授業参加度が低くなりがちであるため、学生同士でペアを作らせたり、グループに分けたりして、コミュニケーション・ギャップを使った練習などをさせる必要がある。また、個人差はあるものの、日本語の初歩的な文法的知識については既習であるが、実際の場面での運用力が低い、あるいは知識そのものが不正確である、などの問題を抱えている者が多いため、既存の知識を活性化させつつ、実際の日本語運用のスピードや自然さを身につけさせることを目指す点が、いわゆるゼロ初級者に対する授業とは異なるところであろう。

次の第4節では、このような初級後期の日本語学習者のニーズに応えるため、具体的に行われた4つの試みについて詳しく報告する。

#### 4. 「J400」における新しい試み

##### 4.1 新出語彙の予習宿題

###### 4.1.1 新出語彙の予習宿題の目的

これまでJ400レベルでは、それぞれの課に出てくる新出単語の導入がなされていなかった。近年、日本語クラスの受講者数が増える中、実際どの程度一人一人の学習者が新出単語を予習し、事前に次の課の語彙を理解した上で授業に望んでいるのか計りかねる。そのため、2学期よりJ400のクラスでは「New Words sheet (NW)」を導入した。J100～J300までは、新出語彙の導入を「New words Quiz」として、授業前に5分程度の小テストで実施しているが、J400では次の課の予習の徹底を図り、新出単語の定着を促す目的で新しい課に入る前に、宿題としてNWを提出させた。

###### 4.1.2 新出語彙の予習宿題の概要

新出語彙の予習宿題の問題形式として、ここに21課のNWの一例を紹介する。NWの分量は各課、A4裏表一枚で15問前後の問題数に統一し、宿題として点数化するために各20点満点で配点も加えた。

まず<例1>の問題1や2のように、文中にあてはまる新出動詞を下の四角の中から選び、それを活用させる問題や、適切な形容詞や副詞を選択させる問題を取り入れた。次に問題3のように文に当てはまる語の絵を選び、それを活用させる問題もある。これは既習の文型やその活用、時制などを再確認させるねらいがある。

さらに、問題4では文の一部を与えて残りの文を完成させる問題、キーワードや副詞を

与えて文を完成させる文作成問題も盛り込んだ。また、次の課に動詞の活用が新しく導入される場合は、予習を徹底させる目的で動詞の活用表も入れた。

<例1> 21課のNew Words Sheet (NW)

J400 L21 New Words

/ 20

1. 下の□から正しいものを選んでください。形を変えてもいいです。(1点×5)

(1) 蒸が ( ) で、よかったですね。

(2) 前日、さいふを落としたことに ( ) ませんでした。

(3) 友達から ( ) お金を落としました。

(4) 私は、大学の試験に ( ) ので、とてもうれしいです。

(5) ご迷惑をお ( ) て、申し訳ありません。

あずかる きがつく さがる ごろかへする かける

2. 次の□の中から適当な形容詞(appropriate adjectives)や副詞 (appropriate adverbs) を選んで書いてください。(1点×6)

1. これは、母からもらった ( ) ゆびわ(ring)です。

2. 明日は ( ) 早く帰りたいんですが…。

3. 朝からうるさいんですけど、 ( ) にしててください。

4. 今日、宿題の提出日のことを ( ) 忘れていました。

5. 電車でリベスのほうが故田まで ( ) ですよ。

6. ( ) 山田さんの言うとおりでですね。

はやい いいかげん だいたいな まったく すっかり できるだけ

3. 次の絵を見て日本語になおしてください。形を変えてもいいです。(1点×5)

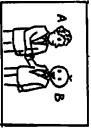
(1) 子どものころ、嫌いなものを ( ) ながら食べてました。

(2) 朝日に雨が降ったので、 ( ) しまいました。


(3) 昨日、〇〇会社の人と ( ) ました。

(4) 著作、 ( ) してもらいました。


(5) 日本語の勉強をしていたら、あつといつ間に時間が ( ) ました。



(3) シリアあう



(4) ちこくする



(5) すぎる

4. 文を作りなさい。(2点×2)

1. \_\_\_\_\_ て、ご迷惑をおかけしました。

2. 申し訳ありませんが、\_\_\_\_\_ ていただけませんか。

このように、NWは次の課の予習を徹底させるという目的だけではなく、問題文に既習文型、既習語彙も積極的に組み込むことにより、それぞれの学習者が文脈の中で語彙の意味を理解し、覚えることができるようにした。また、これまでの既習項目で個々の不確かな点を再確認できるという利点がある。その他、教師側も学習者がどのくらい既習、未習文型や語彙を理解をして授業に臨んでいるかを把握することができるという利点もある。

#### 4. 1. 3 新出語彙の予習宿題の課題

これまで、新出語彙の導入を宿題にする利点を述べてきたが、このNWを宿題に導入するという点で、今後の課題点もいくつか考えられる。予習の徹底のために、新出単語や語彙を正しく活用させ、書かせることだけに焦点を当てると、実際にコミュニケーション的な授業で導入されたとき、聞き取った単語をきちんと理解できるかということである。新出単語、語彙の導入では発音練習も十分に行われなければ、実際の授業で正しく聞き取ることは難しいだろう。

そのために、J400のコースに組み込まれている音読練習、ディリースピーチ（後のDaily Talk）などに関連づけ、会話練習のような自然な文脈の中でも積極的に学生が自分のものとして取り入れて、定着できるように配慮していかなければならないだろう。また、今後は実際に導入した中で出てくる問題点、難易度などを吟味し改訂していく必要があるだろう。

### 4. 2 音読練習

#### 4. 2. 1 音読練習の目的

長音や促音が正確に発音できない、清濁の区別が難しい、アクセント、イントネーションに問題がある、流暢さに欠ける、など、初級後期になっても日本語の発音に問題を抱えている学習者は少なくない。また、文を読む際に、文節や文の意味に配慮せず、ひたすら「文字を読んでしまう」学習者も見られる。発音上の問題は、コミュニケーションに支障をきたす原因にもなりうるが、1クラスの学習者数が多く、問題点も異なるため授業で取り上げにくい、時間的な制約がある、などの理由で、十分な手当てがなされていないことが多い。しかし、学習者が自分の日本語の発音上の問題点に気づき、自ら改善していくのは困難であると思われる。そのためJ400では、学習者の抱える発音上の問題点の意識化と改善を目的とし、「音読練習」の活動を取り入れた。本節では、「音読練習」における1学期の実践の成果と課題と、2学期の前に行なった活動の見直しと改善について報告する。

#### 4. 2. 2 1学期の音読練習の概要と成果

まず、1学期の「音読練習」の概要について述べる。1学期は基本的に学習者が自習として発音の練習を行い、その成果を中間試験、期末試験の2回テストで測定し、フィード

バックをする、という方法で行った。

この活動の目的、練習方法等については、学期の第2週目に説明を行った。学習者には、(1) 日本語らしい発音で読めるようになる、(2) 自然な速さで、流暢に読めるようになる、(3) 意味のまとまりに注意しながら読めるようになる、を活動の目的として提示した。

教材は『SFJ』vol.3 Notesの第19～24課の「Report」を使用した。学習者には各課の「Report」を集めて作成した「音読スクリプト」を配布した。また、web上の「Class Library」<sup>3</sup>から音源(MP3)を自由にダウンロードできるようにし、自宅でスクリプトを見ながら、何度も聞いて練習するよう指示した。また、自主練習の方法として、シャドーイングのやり方を紹介した。

教室での活動は、1) 中間試験の後に全体フィードバックと個別指導、2) 期末試験の前に全体練習と問題点の指摘、という内容で2回行った。

次に、本活動の成果について述べる。定期試験では、前もって指定したReport文を学習者が教師の前で一人ずつ音読し、録音した。評価項目は、発音(2点)、流暢さ(2点)、イントネーション(1点)で5点満点とした。その結果、中間、期末の両方を受けた学習者31名のうち、中間より期末の評価が高い:16名、同じ評価:10名、中間より期末の評価が低い:5名、であった。この結果から、「音読練習」に一定の効果があつたと言えよう。

また、学期終了時に行った授業アンケートでは、「音読練習はあなたの日本語を上達させたか」「音読練習はおもしろい活動だったか」「音読練習は役に立ったか」のいずれの質問に対しても、5段階評価で4以上の評価がなされており、この活動が学習者から好評であったことがわかる。また、自由記述には、「もっとやるべきだ」「2回以上あつたほうがいい」「デイリーリーディングがあつたらいい」など、クラスでの活動回数が増えることを希望する回答が見られた。その一方で、「クラス全体での練習はうるさくておちつかない。他の練習方法を」という、否定的な意見も少数ではあるが見られ、教室での活動の見直しという課題も残された。

#### 4.2.3 2学期の「音読練習」の改善点

1学期の成果と課題をふまえ、2学期開始前に、担当者全員で「音読練習」の見直しと検討を行った。検討の結果、「音読練習」をDaily Reading Aloud(以下DRA)とし、毎回の授業の活動の一つとして行うことになった。2学期の主な改善点を以下に述べる。

1. 定期試験日を除くほぼ毎回の授業で実施
2. 教材は1学期と同様、『SFJ』の第19～24課の「Report」をまとめたものに、教師からのコメント欄を追加。「Daily Talk」と合わせて編集したものを『話す・聞く練習テキスト』として学期の初日に配布

### 3. 各課を3、4回で実施

- 1 回目：聞かせて全体の内容把握、テープについて前半をコーラスで音読（発音の問題点をチェック）
  - 2 回目：前半を文ごとに音読、後半をコーラスで音読（発音の問題点をチェック）
  - 3 回目：全体を文ごとに一人一人回して音読（発音の問題点をチェック）
  - 4 回目：全体をテープについて音読（発音の問題点をチェック）
4. 活動中に見られた発音の問題点は、次の日の教師に伝え、全体で問題点をシェアし、繰り返し注意・練習する
5. 各課が終わった段階で、毎週1回、DRAとは別に全体フィードバックの時間を設置。全体フィードバックの日には、宿題（チェック希望者のみ）として、自分の音読をテープに録音して提出する。授業中に何人かのテープを聞いて、フィードバックと全体練習を行う。また、テープと一緒に『話す・聞く練習テキスト』を提出する。教師はテープを聞き、コメント欄にコメントや問題点などを記入して翌日返却する。

#### 4.2.4 音読練習の課題

この活動の今後の課題としては、「音読練習」を全体授業の中でいかに効果的に行うかという実践方法のさらなる見直しの必要性和、より効果的かつ合理的なフィードバックの方法の検討が挙げられる。特に後者については、評価のばらつきを避けるために、現在一人の教師が担当している。授業での全体フィードバックと、2クラスの学習者が提出したテープを聞き、紙によるフィードバックを行うのは、多くの時間と負担・労力がかかる。今後も学習者の増加が見込まれており、2009年度3学期には3クラス同時開講が予定されている。そのため、複数の教師が評価を担当するという方向で検討を行わなければならない。しかし、教師の音声教育観はそれぞれで、先生が変われば評価も変わるということになるため（小河原・河野2009）、何に重点を置き、どのように指導するのかを、複数の担当教師が共通の認識をもって取り組んでいくことが重要である。

また、発音練習を独立した活動として行うのではなく、SDにおける口頭練習やデイリースピーチ（後のDaily Talk）といった活動と連携することも必要であろう。

### 4.3 デイリースピーチ

#### 4.3.1 デイリースピーチの目的

初級後期では、コースの終わりに口頭発表能力の達成度をみるため、様々なトピックで学生に5分～10分程度のスピーチ発表を課す場合もあるが、スピーチというと、学生たちは立派なことを話そうと構え過ぎてしまい、普段習っていないような語彙や文型を使ってスクリプトを作ってくる傾向があった。そのため、自分の母語で書いたものから直訳して



不自然な日本語になっていたり、日本人の友達に書いてもらったりしてすばらしい内容になっていても、自分では覚えきれずにただどしどしく読むだけになってしまったり、コースで学習したことが生かされているとはいえないスピーチもあった。

そこで、コース中に習った会話表現や文型を使って、即興で話させる練習ができないかという提案が出された。学生が何かを準備してきて話すのではなく、クラス内で与えられたトピックについて即時に話す練習、またその話を聞いて即時に相づちを打ったり、意見を返したりするという練習である。それが「デイリースピーチ」(2学期以降は「Daily Talk」となる)の基本コンセプトである。

2009年1学期のJ400では、「毎日話す・毎日聞く活動」として、次の4つの目的で「デイリースピーチ」を行った。

- (1) 自分の意見を即時に述べるようになる
- (2) 相手の意見を聞くことができるようになる+聞く表現が使えるようになる
- (3) 相手の意見をふまえて自分の意見が述べられるようになる
- (4) 意見交換ができるようになる

#### 4.3.2 デイリースピーチの概要

全50回の授業のうち、デイリースピーチは学期の後半のうち、13回を使って行い、活動時間は1回10分程度を目安とした。基本的にすべてペア活動である。活動は以下の3段階に分けて実施した。表1にステップごとの活動と手順を述べる。

【表1】ステップごとの活動と手順

	活 動	手 順
1 <sup>st</sup> step	話し手：自分の意見を即時に述べる練習	毎回、くじでトピックを決め、1分考えて1分話す。
2 <sup>nd</sup> step	話し手：自分の意見を述べる練習 聞き手：聞き方の練習 聞いて意見を述べる練習	話し手：手順は1 <sup>st</sup> stepと同じ 聞き手：あいづちや聞き返しから始め、慣れてきたら、相手意見の引用や要約をする。さらに、相手の意見をふまえて自分の意見を言う。
3 <sup>rd</sup> step	意見交換する (成績評価対象)	2 <sup>nd</sup> step とほぼ同じ手順

1<sup>st</sup> step、2<sup>nd</sup> stepのスピーチのトピックは表2、表3のとおりである。3<sup>rd</sup> stepは2<sup>nd</sup> stepとほぼ同じであった。1<sup>st</sup> stepは身近な話題で自由に話せるもの、2<sup>nd</sup> step以降は、意見の対立が生まれやすいものを設定した。また、スピーチのひな型は1<sup>st</sup> step、2<sup>nd</sup> stepともに共通で設定した。

【表2】 1<sup>st</sup> stepのトピック

1	今、一番行きたい国はどこですか。	8	嫌いな動物は何ですか。
2	好きな動物は何ですか。	9	何歳のときに戻りたいですか。
3	自分の国を出る前の日、何をしましたか。	10	歴史の中の誰と会いたいですか。
4	あなたの国ではかぜをひいたとき何を食べますか。何を飲みますか。どうしますか。	11	日本語のクラスは何時から何時までがいいと思いますか。
5	どうして日本に来たのですか。	12	世界の中の誰と会いたいですか。
6	自転車はどこで買いましたか。	13	暇なとき、どこに行きたいですか。
7	よく買物に行く店はどこですか。	14	犬と猫とどちらが好きですか。

【表3】 2<sup>nd</sup> stepのトピック

1	日本語のクラスは午前がいいですか。午後がいいですか。	6	つくばで生活するなら、車とパソコンとどちらのほうが必要ですか。
2	日本語の授業で宿題があったほうがいいですか。ないほうがいいですか。	7	つくばでは、スーパーの袋にお金をはらいます。賛成ですか。反対ですか。
3	ごはんを食べるとき、好きなものから食べますか。あまり好きじゃないものから食べますか。	8	デイリースピーチはあったほうがいいですか。ないほうがいいですか。
4	住むなら、田舎と都会とどちらのほうがいいですか。	9	宿舎で飼うなら、犬のほうがいいですか。猫のほうがいいですか。
5	就職するなら仕事はおもしろいけど給料が安い会社と、仕事はおもしろくないけど給料が高い会社とどちらがいいですか。	10	筑波大学の授業を全部英語にしたほうがいいと思いますか。しないほうがいいと思いますか。

#### 4.3.3 活動の成果と課題

以下、デイリースピーチの4つの目的と、学期末に行った学生に対するアンケート結果に沿って、活動の成果と課題を分析する。

まず、(1)「自分の意見を即時に述べるができるようになる」に関して、1<sup>st</sup> stepでは辞書に頼ろうとする学生が多く、1分で考えをまとめること、1分で話すことが難しいようであった。そのため、辞書を引かず、自分の持っている知識を十分活用して話すように指示したところ、2<sup>nd</sup> step、3<sup>rd</sup> stepと回数を経るごとにかなり上達した。また、初めは人前で日本語を話すことに抵抗を感じていた学習者も、何度もくり返し行うこと、そして、クラスのいろいろな人と話すことによって、徐々に活動を楽しむようになっていった。

次に、(2)「相手の意見を聞くことができるようになる+聞く表現が使えるようになる」と(3)「相手の意見をふまえて自分の意見が述べられるようになる」は、2<sup>nd</sup> stepから取り入れたが、初めの頃はあいづちがぎこちなく、不自然な様子が見受けられたものの、2<sup>nd</sup> step 後期、3<sup>rd</sup> stepになると、あいづちや聞き返しに関してはかなり自然に使えるようになった。一方で、相手の意見の引用や要約をして自分の意見を言うことは最後まで難

しいようであった。

(4)「意見交換ができるようになる」に関しては、ステップを経て、ある程度学生同士で意見を言ったり聞いたりすることができるようになったものの、スムーズにやりとりが行われるようにはならなかった。これには、設定したひな型と導入した表現の問題が挙げられる。今回は「スピーチ」という形をとったために、聞き手の介入を妨げてしまった感否めない。また、話し手から聞き手へのターンの譲渡の表現や、発言と発言の間のつなぎの表現を十分に導入できなかったことも影響していると思われる。

一方、学期末にデイリースピーチに関するアンケートを行ったところ、J400とJ400-2間の満足度の差、トピックに関する問題点が浮き彫りになった。

まず、J400では満足度が高かったものの、J400-2では満足度が低かった。このようなクラス間の差は、それぞれのクラスの雰囲気起因と思われる。J400はもともと顔見知りが多く、クラスの雰囲気も活発であった。一方、J400-2は初めて一緒に勉強するメンバーが多く、クラスの雰囲気もJ400ほど活発ではなかった。このことから、本活動の満足度にはクラス全体の雰囲気や、学習者間の人間関係も大きく影響すると考えられる。

また、アンケートから、本活動は日本語力の向上や、役に立ったという点に関しての評価は高かったものの、トピックに関する満足度が低いという結果になった。トピックに関する満足度が低かった要因は、アンケートの自由記述でも指摘されていたが、トピックの難易度やトピックに対する興味、関心度にばらつきがあったことが挙げられる。

しかし、同時にアンケートの自由記述において、本活動の重点でもあったディスカッションの方法、勉強した文型の活用、聞き手の表現の練習などについて好意的な評価も見られたことから、本活動の目的を学習者もある程度理解し、共有していたと思われる。

以上から、本活動の成果は、「継続性」、「既有知識の活性化」、「聞き手の言語行動の意識化」の3点であるといえよう。まず、継続性については、毎日短い時間でも続けることによって、話すことや聞くことが習慣化し、徐々に学習者の心理的・言語的負担が軽減する様子がうかがえた。次に、既有知識の活性化については、自分の持っている知識を短い時間に総動員してひとつのまとまりのある形で話すという活動を行うことで、すでに学習した文型、持っている知識の活性化に効果があると考えられる。さらに、聞き手の言語行動の意識化については、初級段階ではなかなか難しい聞き手としての言語行動を意識し、くり返し練習する機会を与えることができると思われる。

一方、活動のためのクラス内の雰囲気作り、より満足度の高いトピック選定の方法、日常会話に近い意見交換の型と表現の導入の必要性が課題として残った。

#### 4.3.4 2学期の改善点

1学期の実践をふまえ、2学期の前に、担当者全員で「デイリースピーチ」の検討を行

い、以下のような改善案を立てた。

1. 「デイリースピーチ」を「Daily Talk」と改め、途中は成績評価の対象としない。
2. 各ステップを以下のように設定する。
  - step 1 : 意見を即時に述べるスピーチ
  - step 2 : 聞き手が積極的な役割を担うインタビュー
  - step 3 : 相互に聞き、話すディスカッション
3. 教材の素案を担当教師が作成し、全員で検討後、DRAと合わせて、『話す・聞くテキスト』として編集し、学期の初日に配布する。教材はステップごとに以下のように構成される。
  - (1) ステップの進め方、(2) モデル会話、(3) 表現練習、(4) トピック集、
  - (5) 学生の自己評価欄、(6) 教師評価欄
4. step 3 のトピックには学生のアイデアを反映させる

本活動は聞き手も積極的に介入することを目的とするため、名称を「デイリースピーチ」から「Daily Talk」と改め、途中段階は評価の対象外とした（評価は期末オーラルテストで行う）。また、活動をスピーチ、インタビュー、ディスカッションの3段階に分け、1学期よりも日常会話に近い意見交換の型と表現の導入を目指す。教材には、モデル会話や表現練習に加え、学生自身による自己評価欄も設け、ポートフォリオ式に成長を記録できるようにした。そして、より学生の満足度の高いトピックを設定するために、step 3では、学生のアイデアを取り入れてトピックを決定することとした。

#### 4.4 オーラルテスト

J400においてオーラルテストは、中間テストと期末テストの2回行っている。『SFJ』の19課から21課までを中間テストとし、22課から24課までを期末テストとしている。本年度1学期は既習表現や文法を使って会話を作ったものと、モノログで自分の意見を言ったり説明をするというテストを行って、口頭表現能力の評価を行った。

テストを実施した後、学習した内容を生かした評価をするための問題の作成、評価基準等についての問題点も出てきたので、次学期以降のオーラルテストに向けて検討していきたい。

##### 4.4.1 コースにおけるオーラルテストの流れ

授業における既習表現等の口頭表現能力の評価をすることから、オーラルテストは次のような流れで行う。

CD／ロールプレイ

- ・各課のCDで会話能力を養成する練習をする。
- ・オーラルテストでチェックする会話を中心に練習をする。

オーラルテストの説明と準備

- ・オーラルテストのやり方や注意事項を説明する。
- ・テストの評価基準を確認し、準備に生かす。
- ・テスト時のペアを決めておく。
- ・配布された問題を見ながらSDの文法事項やCDの表現を確認し、各自準備をする。
- ・教師は学生の日本語（文法項目、発音等）をチェックをする。

オーラルテスト

- ・学生が会話したりモノログで意見を言ったり、説明したものを録音する。
- ・評価シートにしたがって目標を達成したかチェックする。その他、気づいたことについてはコメントを記入する。

フィードバック

- ・オーラルテストの評価シートを返却し、学生共通に見られる間違いをとりあげて全体に説明したり、個々にフィードバックを行ったりする。

#### 4. 4. 2 1学期のオーラルテスト

まず、2009年1学期に実施した中間オーラルテストについて報告する。

問題1：2人で会話をしてください。終わったら交代してください。

Aさん：Bさんに日本に来てびっくりしたことについてきいてください。

Bさん：日本に来てびっくりしたことについて話してください。

①から④までの表現をたくさん使ってください。4文以上で話すこと。

- ① ～ことがある
- ② ～る／～た時
- ③ ～そうだ：I have heard that
- ④ たら／ば

例：わたしは日本人の家庭でホームステイをしました。友だちのアパートにはいったことがあります。家庭ははじめてでした。家に入るときくつをぬいでスリッパをはきました。

日本料理をたべました。日本人はたべる時、はしをつかうと思いました。でも、手ですしをたべました。わたしはびっくりしました。友だちに聞いたら、おにぎりも手でたべるそうです。

問題はオーラルテスト準備の時に配布し、学生は事前に準備をする（全て教師がチェックしてあるわけではない）。テストを実施する時は学生は準備したものを読まないことになっている。テストはテープレコーダーを使いペアで会話の録音を行った。

この問題では19課、20課の文法事項「～そうだ (19課)、～ことがある (20課)、～る／～た時 (20課)、たら／ば (20課)」を使うように指示している。従って、これらの表現を正確に会話で使っているかが評価の対象となる。また、問題で指定されている会話に至るまでの場面設定やあいさつ、会話のきっかけを作るという過程を含めて会話を作る必要がある。一問一答のような簡単な会話にならないように、4文以上で話すという指示を与えた。

問題2：みなさんの国の料理の作り方を先生に説明してください。

「まず(はじめに)、次に、それから、最後に」という表現を使ってください。

問題2はモノログである。テストの際、学生は教師に料理の作り方を説明する。教師は聞き手となり学生の評価を行った。この問題はテキストの20課CD「やり方を説明する」と関連のある問題である。また、「まず(はじめに)、次に、それから、最後に」というやり方を説明する時に、順序を表す言葉を適切に使用できるかを評価の対象としている。料理の説明に必要な語彙についてはテキストのCDの中でとりあげている。問題2においても、話しかける(あいさつ) → その作り方を説明する → あいさつ という流れを使って話すことが必要である。

次は、2009年1学期の期末テストである。

問題1：2人で会話をしてください。終わったら交代してください。

Aさん：先輩のAさんに頼みごとをします。

Bさん：理由を言ってAさんの頼みをことわります。

②から④までの表現をたくさん使ってください。4文以上で話すこと。

- ① ～んですけど(んだけど)
- ② ～なければならない(なくてはいけない)
- ③ ～てもらおう、～てもらいたい、～てくれる、～てほしい
- ④ 頼みをことわる表現

この問題はテキスト23課の文法、CDの表現「頼みと断り」を含んでいる。先輩に頼みごとをするという設定から、先輩には丁寧な表現で話しかけることを要求している。

また、問題で指定されている会話に至るまでの場面設定やあいさつ、会話のきっかけを作るという過程を含めて会話を作る必要がある。ここでも一問一答のような簡単な会話にならないように、4文以上で話すという指示を与えた。

問題2：次のテーマの中から一つ選んで、あなたの意見を言ってください。

- ① 日本語に、漢字はあった方がいいか、ない方がいいか。
- ② 今度生まれてくるならば、男がいいか、女がいいか。
- ③ 和式の家と洋式の家と、どちらがいいか。

{Nが(のほう)、Vるほうが、Vたほうが} いい {です、と思います  
んじゃないでしょうか}

理由：～から し(、～から) し、(～し)

という表現を使ってください。

問題2はモノログである。テストの準備時にテーマを選択し、意見をまとめておいたものを発表する。テキスト24課CDの「意見に賛成する、反論する、自分の意見を述べる」と関連がある。また、J400で行われていたデイリースピーチでは、コースの後半で相手の意見を踏まえて自分の意見を述べるという学習をしているが、このことも問題と関連している。

#### 4.4.3 オーラルテストの評価

各テスト共通の評価シートを使って評価を行った。

評価シート					
正確さ	1	2	3	4	5
表現を使ったか	1	2	3	4	5
流暢さ	1	2	3	4	5
発音	1	2	3	4	5
<u>コメント</u>					

各評価項目を5段階で評価し、評価項目以外で気づいたことはコメント欄に記入した。

問題1では指定した4文以上で話すことはできていたが、学生個々の発話量の違いが気になった。発話量が少ないと間違いも少なく正確さは評価が高くなる。しかし、発話量が多いと間違いは増えるが内容は豊かであることがある。そのことから、評価に内容の豊かさを測る項目を設定する必要があると考える。また、評価対象は頼みを断わるBであった

が、頼みごとをするAにも間違いがあったことから、両者を評価対象にする必要性もあると考える。

問題2では助詞や動詞の活用、自他動詞等の文法の誤りと、料理に関連する語彙、動詞の間違いが多かった。また、先生に作り方を説明するという設定のため敬語を使う必要があったが、敬語の誤りが多くみられた。

期末テストの問題1ではチェックする表現は正確に言えても、会話の始まりや話しかける時の表現が適切ではなく、自然な会話ができない学生が多かった。また、あいづちの表現やイントネーションが不適切であることが多かった。

問題2では学生の話す能力差が顕著に現れていた。学生が意見を述べやすいテーマの選択ができ、1学期間デイリースピーチを行い、自分の意見を述べる練習が積み重ねられていたからではないだろうか。意見の内容については、意見の根拠を事前に調べそれを元にわかりやすく発表できる学生もいた。

#### 4.4.4 オーラルテストのフィードバック

オーラルテストを評価した評価用紙を実施後に学生に返却し、フィードバックを行った。学生全体に共通する気づいたこと、問題点については取り上げて説明した。その後、学生個々の問題点や間違いを訂正して再び会話作りに取り組みさせた。

オーラルテストで間違った箇所が訂正されているか確認するため、再度原稿を書いて提出させてみた。すると、間違いが訂正されず、再び間違えている学生が多かった。

期末オーラルテスト時に理由があって一斉にテストを受けることのできなかった学生が数人いた。彼らについては別に再テストを行った。この時は口頭で間違いを指摘し、フィードバックをその場で行うことができた。ある学生は「～は」の助詞の「は」をすべて「ha」と発音していた。自分で「ha」だと思い込んでいたのである。中間テストでも同じ間違いをしており、評価用紙に間違いを指摘していたが、訂正されていなかった。このことから、評価用紙に書いただけのフィードバックだけではなく、口頭でフィードバックすることの効果も挙げられる。また、発音、イントネーション、アクセント等の音声に関する訂正は口頭によるフィードバックが必要であろう。

#### 4.4.5 改善案と今後の課題

1学期終了後、J400担当教師が反省会を持ち、2学期に向けてオーラルテストの改善点について話し合った。そして、以下のように改善案を作成した。



- 1) 中間テストでは、問題を1つに絞り、教師と会話することを通して評価を行う。

問題：みなさんの国の料理の作り方を先生に説明してください。  
 「まず (はじめに)、次に、それから、最後に」という表現を使ってください。  
 説明した後、先生が質問をしますから答えてください。

- 2) 期末テストでは、Daily Talkの活動の最終評価としてオーラルテストを行う。

問題：2人でディスカッションをしてください。  
 次のテーマの中から一つ選んで、ディスカッションをしてください。

1. 日本語に漢字はあったほうがいいのか、ないほうがいいのか
2. こんど生まれてくるならば、男がいいか、女がいいか
3. 和式 (Japanese style) の家と、洋式 (Western style) の家と、  
 どちらがいいか

{Nが (のほう)、Vるほうが、Vたほうが} いい {です、と思います}  
 理由：～から し (、～から) し、(、～し)  
 という表現を使ってください。

- 3) 期末オーラルテストの評価は、Daily Talkの評価でもあることから、新たに作成する。  
 評価シートは学生用と教師用の2種類を作成した。

オーラルテスト		評価シート (学生用)
		／40
ないよう 内容 ひょうげん 表現	わかりやすく意見や理由が言えたか 表現を正しく使ったか	5 4 3 2 1 5 4 3 2 1
あいづち しつもん・かくにん 質問・確認	あいづちをうったか 相手に質問や確認をしたか	5 4 3 2 1 5 4 3 2 1
ふんぽう 文法 はつおん 発音	文法は正しかったか 発音、イントネーションは正しかったか	5 4 3 2 1 5 4 3 2 1
りゅうちょう 流暢さ たいど 態度	話す速さが適当で自然だったか アイコンタクトをとり笑顔で話したか 声の大きさは適当だったか	5 4 3 2 1 5 4 3 2 1 5 4 3 2 1
<コメント>		

教師用のオーラルテスト評価シートでも、学生用評価シートと同じく話の「内容」と使用された「表現」、「あいづち」と「質問・確認」、そして「文法」「発音」「流暢さ」「態度」の観点からその出来具合をそれぞれ5段階で評価している。ただし、教師用のオーラルテスト評価シートでは、5段階評価をただ数値で示すだけでなく、それぞれに日本語で説明がつけてある。たとえば、「あいづち」については、以下のような5段階評価となっている。

- あいづち
- 5：いろいろなあいづちを適切どころにうつことができる。
  - 4：あいづちを適切どころにうっているが、やや少ない。
  - 3：あいづちをうっているが、やや適切さに欠ける。
  - 2：あいづちが少なく、適切ではない。
  - 1：あいづちをうたない、または極端に少ない。

このような評価シートを事前に学生たちにも見せ、どのような基準で評価されるのか、望ましいパフォーマンスがどのようなものなのかを理解させた上でテストを行うようにしている。

## 5. 初級後期レベル授業の課題

2009年度1学期の「J400」コースを中心に、2学期に向けて検討された改善点まで含めて報告した。このレベルの学生は、初級文法や語彙に関する知識については、不完全ながらもすでに持っている者が多いため、テキストをみると「これは私には易しすぎる。もっと新しいことを勉強したい」と言う場合も多い。しかし、実際には、助詞や活用などの使用が不正確、適切な語彙や表現を適切なタイミングで使うことができない、会話の自然なスピードについていけないなどの問題があることを自覚していないのである。次の中級「J500」レベルになると、学生たちは、より大人数の講義形式の文法授業を聞いたり、聞く・話す・読む・書くという各技能別のクラスにおいて自力で予習、復習をしながら別々の課題をこなすことを要求される。したがって、初級後期という初級から中級への橋渡しのレベルにおいては、学生に自己モニター力（自分の足りない部分を自覚する力）をつけ、自律的学習能力（辞書や必要なツールなどを使って自力で足りない部分や勉強したい内容を補うことができる力）をつけることが何より重要であろう。具体的には、文法や語彙・表現、発音などの弱点を自覚させること、自分で予習・復習ができること、クラス内外での自発的な運用練習ができること、そして自然な日本語の発話のスピードについていけるようにすることをこのレベルの大きな目標と考える。

そのため、2009年度は復習用の宿題に加えて「新出語彙の予習シート (NW)」、毎日行う授業活動として「音読練習 (DRA)」、「デイリースピーチ (2学期以降はDaily Talk)」という新しい試みを行い、さらに2学期には「Daily Talk」の集大成としての「期末オーラルテスト」という流れを作ってみた。

本稿を執筆したのは、2学期にこれらの活動を改善しつつ実践しているところであったため、その本当の成果についてはまだ報告することができないが、途中段階の感触としては一定の成果を上げているように思われる。今後の課題として、各活動においても細かな問題があると予想されるが、ここでは現段階で考えられる課題を大きく2つ述べておきたい。

まず、この初級後期の「J400」コースで行われている学習活動のすべてが、前述の「学習者の自律性を育てる」という教育目標に向けてうまく関連づけられ、機能しているかどうかを検討することである。それぞれを独立した活動として行うのではなく、1つのコースの中でうまく連携されることが重要であろう。また、教師主導で知識を与える部分と、学習者に自発的に運用練習させる部分とのバランスをどうとっていくかも考えなければならぬ。

第2に、上記のような自律的学習を促進するためには、教師のフィードバックが非常に重要であり不可欠であるが、それにかかる時間、エネルギーをいかに無駄なく合理的かつ効率的にしていけるかを検討することである。現在、「J400」の担当教師は、1コマ75分の授業を教えるために、その準備、クイズのチェック、学生の活動のチェック、宿題のチェックおよびそれらのフィードバックなどに、授業時間のおよそ3倍～4倍の時間を費やしていると思われる。1クラスの学生数が適正人数（初級であれば10～15人程度まで）を越えれば、さらにその負担は大きくなる。

このレベルでの日本語教育をさらに改善していくために、以上を今後の課題として検討を続けていきたい。

## 注

1. この成績配分は、2009年2学期のものである。1学期とは、中間テストの結果30%（筆記テスト15%、オーラルテスト15%＝音読5%＋会話10%）と宿題の平均10%の配分は変わらないが、文法小テスト（SDQuiz）の割合が10%から15%へ、期末テストの結果が40%（筆記テスト25%、オーラルテスト15%＝音読5%＋会話10%）から45%へと増えている。その代わりに、1学期にはデイリースピーチ（10%）を評価の対象としていたのを2学期にはやめ、Daily Talkの最終Stepを期末オーラルテストに含めた。
2. 受講生の漢字のレベルは、必ずしも日本語のレベルとは一致していない。日本語がJ400レベルの学生でも、漢字のレベルはK200からK600まで様々である。
3. 筑波大学留学生センターが開設したサイトで、教師が授業で使用する教材のファイルや音源ファイルなどをおくことができる。学習者はIDとパスワードを入力し、ファイルをダウンロードする。学内の端末からのみアクセスが可能である。

**参考文献**

- 小河原義朗・河野俊之 (2009) 『日本語教師のための音声教育を考える本』 アルク  
筑波ランゲージグループ 『Situational Functional Japanese』 vol.3 Notes 凡人社  
小林典子ほか 『わくわく文法リスニング』 凡人社